

## 金田地区の産業 養蚕業 (1)

(2024. 2)

養蚕業とは、蚕（カイコ）を飼育して、繭（マユ）を生産する産業を指しています。繭からは生糸（キイト）が生産され、生糸を織物（絹織物）に加工することによって繊維産業として成り立ちます。

蚕の飼育には桑の葉を餌として食べさせます。食欲旺盛な蚕を飼育するには、広い桑畑が必要になります。蚕の卵（蚕種・さんしゅ）は、業者から購入し、桑葉を与えて育てます。

金田地区は生糸や、絹織物を生産する技術力、工場を運営する経営力や資金力はなく、繊維産業のうち養蚕を産業として成立させていました。蚕を飼育して、繭を生産することです。

繭は、金田村に出入りする、仲買人により計量され買い取られてゆきます。



桑畑 (参考資料)



金田地区は、地形的に「金目川」からの農業用水を取水するのに有利な土地です。地域は米の単作地帯と評されるように、米作農家を中心とした村落です。「金目川」の流れの方向を見てもわかる通り、飯島地域から、標高の低い「鈴川」方面にかけて流れます。排水路の流れの方向も同様です。地形的には、金目川が作り出した扇状地です。

堀替え前の金目川は「自然堤防」を形成し、地区内にも、自然堤防の「微高地」が点在しています。その土地は、居住地や畑作地として利用されてきました。

蚕の餌になる「桑」は、「日当たりがよく、風通しがよく、排水性のよい土地」を生育条件としています。金田地区で、この条件を満たすのは、微高地の自然堤防の上に広がる土地が相当します。また、河川の合流地点の砂地などが適地になります。繭の生産は、このような自然条件のみではなく、絹織物が多用されること。生糸や絹織物の輸出が盛んになること。などの社会的、経済的な要因が大切です。生糸や、絹織物の需要が増大することです。繭が売り物になることです。繭の消費が多いこと。繭の需要が高まること。一農家にとって繭が売られ、現金化されることです。


農家にとっては、繭の販売を増やすことで現金収入が増大します。米作中心の金田地区にも養蚕が副業として盛んになった理由です。

■ 金田地区に養蚕業が始められた時期は明確ではありません。

「平塚郷土史事典」には『明治20年（1887）宮田寅治（金田地区の自由民権家）が、長野県小県郡から養蚕業の先駆者会津金次郎を招いて金目を中心奨励した。以来昭和16年（1941）頃まで有利な副業として栄えた』明治以降盛んになったとあります。

- \* 長野県は養蚕や繊維産業（絹織物）の一大勢力地域となっていました。
- \* 日本の各地から、生糸の輸出港、横浜へ向けて「シルクロード」がありました。

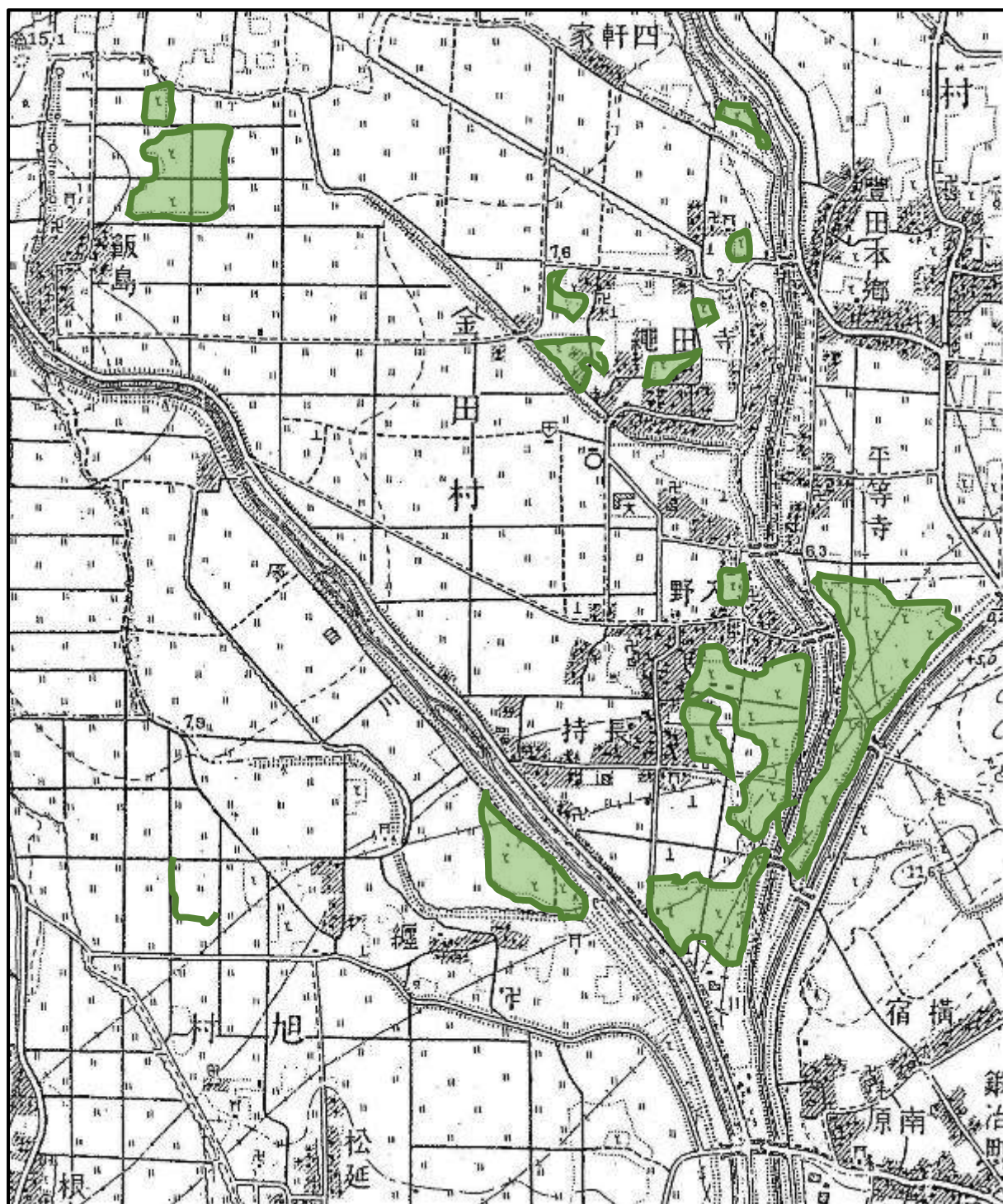
■ 繭の生産に先立つ、桑の栽培地の分布を次ページに記します。


地形図上の  記号が桑畑を表しています。

- ① 入野、長持地域の「鈴川」対岸、渋田川までの豊田地域に分布する桑畑は、入野地域の農家が桑葉の栽培をしていたようです。〈聞き取りより〉
- ② 鈴川右岸地域に桑畑の分布が確認されますが、かつて「金目川」が「鈴川」に合流し、砂地が形成されていたと推測されます。一帯は氾濫が多く、家屋は転居して、この地の字名が「古屋敷」と呼ばれています。
- ③ 地図に「寺田縄」と記された場所は、かつて「お屋敷」と呼ばれた、微高地です。桑畑は、点在というよりここ一帯に分布していたと思われます。
- ④ 金目川の右岸地域は、「筋替え」以前に形成された、自然堤防の痕跡と思われる。
- ⑤ 飯島地域の広い分布は「控え土手」との関連で、かつての金目川氾濫が影響している土地と思われます。



金田地区 桑畑の分布（1937（昭和12）年 大日本帝国陸地測量部・地形図）



-  の区画が、「桑畑」の分布です。金田地区で最大の面積でした。
- 土地利用は、まずは広大な水田が広がり、稲作中心の地域であることが分かります。蚕の餌になる「桑」は、「日当たりがよく、風通しがよく、排水性のよい土地」を生育条件としています。桑畑の分布は、この条件を満たす地域で栽培されていました。